

是彼會員

ペルはクロの仔だったのか

瀬崎 明（会員）

新型コロナウイルス流行がおさまる気配が見えない一昨年の2月だった。「東舞鶴高校の学生がクロの物語を英語で紹介する」とのニュースを新聞で読んだ。文中にはクロはシベリアから最後の引揚船に乗って来た犬との説明があった。

1956年12月26日に舞鶴に到着した引揚船興安丸には、ソ連から解放された最後の捕虜1025人が乗船していた。

戦犯とのいわれない罪で長期抑留と労働を課された人たちで、父はその中にいた。

雪に包まれた舞鶴に父を迎えに行ったのは母と弟だったが、引揚船に犬がいたとの話は聞いた覚えがなかった。

父とシベリアから同船した犬の話に私は興味を覚え、図書館にクロについての文献を探しにかけた。

当時の毎日新聞にクロの記事があり、

その後数名の作家がクロの物語を出版していた。

図書館でクロの物語2冊を見つけた。タイトルも作者も違っていたが、いずれの本も氷海に飛び込んで船を追いかけたくなげなクロの物語だった。

シベリアの収容所に収容された捕虜は息さえ凍る真冬でも外での重労働を強いられていた。

屋外の森林伐採に駆り出されたある日、作業の団は凍死寸前の仔犬を見つけ隠して収容所に連れ帰った。

ソ連の看守がほどなくクロを見つけ犬の飼育を禁止した。命令に従って遠くにクロを連れて行き捨てたが、そのたびにクロは戻ってきた。ソ連側も打つ手なく

最後にクロの存在は黙認されたという。

捕虜たちは飢えをしのぐだけの僅かな食料を割り、クロに分け与えて可愛がった。

娯楽としてやっと認められた野球を始めると、侵入すると射殺と警告されている鉄条網内に入った球をクロがくわえて戻りチームの大事な役割を果たした。収容所での火災の際は、吠え声で皆を起こし大惨事になるのを防いだこともあったと書かれていた。

抑留12年目の1956年に日ソ国交回復が調印され、日本人抑留者全てを日本に帰すことをソ連が認めた。クロと共に過ごした抑留者たちはクロを日本に連れ帰ろうと計画した。犬を隠して船に乗せたがすぐに発見されてしまった。

乗船を許されなかったクロは岸に残された。興安丸が岸壁を離れてしばらくするとクロは氷の海に飛び込んで船を追って来た。船が割った氷に阻まれながら必死に泳ぐクロに気が付いた抑留者たちはクロを助けてくれと玉有船長に掛け合った。

このままでとクロが溺死するのは目に見えていた。船長は決断し船を止めてクロを氷の海から助け揚げた。

クリスマスイブにナホトカ港を出発した興安丸は2日の航海で舞鶴に到着した。



船にあがったクロ



筆者の腕の中のペル



氷の海から引き揚げられたクロ

しかしここでもクロに難問が待っていた。日本政府の許可と動物検疫であった。10数年の歳月を経てやっと帰国した引揚者たちにはいつ上陸を許されるかわからないクロを待つゆとりはなかった。『ラーゲリより愛をこめて』の映画がロングランを続けている。私も見たが観客に若い人が多いのに驚いた。人気の高い俳優の二宮和也と北川景子の出演に魅かれた人たちであろうが、映画に涙する若者も多かった。

この映画にもクロが登場していた。実

は映画の主人公である山本幡男氏の遺書を持ち帰った人たちの中に父がいた。

父は口伝として友へ、母へ、妻へ、子どもたちへの4部に分けられた遺書の2つを頼まれたようだったが全てを書き写したノートをゲートルに巻き込んで持ち帰っていた。

ソ連製の粗末なノートに書かれた遺書は、その後遺族の山本モジミさんから母に返されて今は私の手元にある。

その父が帰国して2年ほど経った頃だった。黒い耳の垂れた仔犬を抱いて帰ってきた。

耳の立った犬が好きだった私には少し不満であったが、仔犬をもらって大喜びだった。犬を渡しながら、名前はペルだと父が言った。

仔犬は父が博多の家に到着した翌朝、軒に吊るした鳥籠からものも言わずにカナリアを空に放したことの詫びだったのだろう。

図書館でクロの記録を探していたときだった。ひょっとしてペルはクロの仔だったのではなかったかとの思いが頭にひらめいた。

記憶にあるペルは確かに写真のクロに似ていた。ペルは目の周りに茶色が混じっていたが、黒い犬で耳は大きく垂れて顔つきも似ていた。

クロは雌犬で上陸後に舞鶴に住む人にもらわれていた。その家には雄犬がいて、クロは仔犬をたくさん産んで、興安丸の船長始め、引揚者にももらわれたと記録にあった。しかも雄犬の名はメルであった。

私の想像は確信に近くなっていたが、姉や弟に確かめても父からは何も聞いていないとのことだった。

母が健在なら知っていたはずだが、先日13回忌を済ませたばかりである。昔、公園のボートに乗りペルを呼んだところ、ざんぶと飛び込みボートに向かって泳いできた。

途中で疲れたのか近くのアベックが乗るボートにはい上がった。「キャーッ」という悲鳴を聞きながらそこで身震いすると、再び飛び込んで私のボートにたどり着いた。

多分これは母犬クロの遺伝であったろうと思うが、確信はなままである。